— 観 察 記 録 —

埼玉県蓮田市におけるズグロチャキンチョウ *Emberiza melanocephala* の観察記録

長嶋宏之^{1,*}・長嶋浩子¹・松原卓雄²

¹ 日本野鳥の会埼玉県支部（現：日本野鳥の会埼玉） 〒 330-0064 埼玉県さいたま市浦和区岸町 4 丁目 26 番 8 号 プリムローズ岸町 107 号

² 槻の森野鳥観察友の会 〒 339-0037 埼玉県さいたま市岩槻区浮谷 2828

(2010 年 4 月 23 日受付；2010 年 9 月 11 日受理)

キーワード：*Emberiza melanocephala*, 観察記録が少ない種, 埼玉県, ズグロチャキンチョウ.

日本鳥学会誌
Japanese Journal of
Ornithology
© The Ornithological Society
of Japan 2011

Hiroyuki Nagashima^{1,*}, Hiroko Nagashima¹, Takuo Matsubara². 2011. A record of *Emberiza melanocephala* from Saitama Prefecture, Japan. Jpn. J. Ornithol. 60: 105–109.

Key words: *Emberiza melanocephala*, Observation record, Saitama Prefecture, Black-headed Bunting.

¹ Wild Bird Society of Japan-Saitama. 107 Primrose-kishimachi, 4–26–8 Kishimachi, Urawa, Saitama 330-0064, Japan.

² Wild Bird Watching Club of Tsukinomori. 2828 Ukiya, Iwatuki, Saitama 339-0037, Japan.

1. 種名・観察個体数：ズグロチャキンチョウ
Emberiza melanocephala 1 羽

2. 観察者名：長嶋宏之，長嶋浩子，松原卓雄

3. 観察日時・場所：2010 年 3 月 14 日，午前 9 時 30 分～2010 年 3 月 17 日午前 11 時 35 分．埼玉県蓮田市黒浜 3629 (36°0'1.94"N, 139°39'43.4"E) 付近の林縁の草地．

4. 観察距離：観察は 10 倍の双眼鏡および 30 倍の望遠鏡を用いて行なった．本個体が何かに驚いて飛び上がり，近くのミズキ *Cornus controversa* に移動した時は 10 m の距離から双眼鏡で観察した．写真撮影は 20 m および 30 m の距離から望遠鏡を装着したカメラで行なった．

5. 観察した環境：観察場所は蓮田市東部に位置する農村地域で，東に 150 m 程離れたところを JR 宇都宮線が南北に通る，その先は比較的大きな工場が並んでいる．南は空き地でその先は住宅地が続く．西は屋敷林と畑に囲まれた農家が 100 軒ほど点在する農村集落と，林を開いて造成した小

規模新興住宅地がある．集落の外は野菜畑や果樹園，雑木林が点在する．北は街道沿いに人家が並ぶ大きな住宅地である．ズグロチャキンチョウを観察した場所は，その北から西がコナラ *Quercus serrata*，アラカシ *Q. glauca*，スギ *Cryptomeria japonica*，ミズキ，イヌシデ *Carpinus tschonoskii*，アオキ *Aucuba japonica* などから成る雑木林，東が林を切り開いた空き地，南がサワラ *Chamaecyparis pisifera*，スギ，イヌシデ等から成る雑木林に囲まれた縦 120 m 横 35 m の草地で，日当たりが良く明るい場所である．同草地はメヒシバ *Digitaria adscendens*，エノコログサ *Setaria viridis*，ハルジオン *Erigeron philadelphicus* 等の枯れ草を草丈 5～10 cm に刈っており，観察した時はセイヨウタンポポ *Taraxacum officinale* とオオイヌノフグリ *Veronica persica* が咲いていた．また同草地ではキジバト *Streptopelia orientalis*，ツグミ *Turdus naumanni*，カシラダカ *E. rustica*，スズメ *Passer montanus*，ムクドリ *Sturnus cineraceus* が採餌していた．

6. 形態に関する記述：体サイズはスズメより大きく，ムクドリより小さい，頭が大きくがっし

* E-mail: nagasima@star.ocn.ne.jp

doi:10.3838/jjo.60.105

JOI:JST.JSTAGE/jjo/60.105

りした体型である。喉部を除く頭部は黒色で、襟は淡黄色。喉、胸、腹、脇、下腹と下尾筒は黄色で、縦斑や横斑はなかった。顔は黒色で、囲眼輪は黄白色で細かった。頭中央線、頭側線、眉斑、過眼線、頬線、顎線および腮線はなく、嘴は白っぽい鉛色で大きく、嘴峰は湾曲してみえた。跗蹠と爪は肉色だった（図1）。上面は頭頂から後頸にかけて灰褐色の地に灰黒色の細かい縦斑があり、肩と上背には灰褐色の地に輪郭が不鮮明な褐色の縦斑があった。この褐色の縦斑に輪郭が不鮮明な赤褐色の縦斑が混じっていた。下背および腰は確認できなかったが、上尾筒は灰褐色だった。翼を閉じているとき、初列風切は三列風切の先から5枚が突出していた。その初列風切の軸斑は黒褐色で、羽縁は淡褐色だった。羽縁の幅は初列風切と次列風切は狭かったが、三列風切は広かった。上面の小雨覆は確認できなかったが、大・中雨覆の軸斑

は黒褐色、羽縁は白色味のある淡褐色で2本の翼帯となってみえた。尾羽は長くて、上面は黒褐色、羽縁は淡褐色で幅がせまかった。外側尾羽に白斑はなく、先端が擦り切れたり汚れている様子もなかった（図2）。

7. 計測値：—

8. 種を同定した規準：観察個体はスズメより大きく、ムクドリより小さいサイズで、顔と頭部が黒く、胸と腹部が黄色、上尾筒が灰褐色、嘴峰が湾曲した長く大きい嘴、翼をたたんだ状態の初列風切の突出枚数が5枚、大雨覆と中雨覆の羽縁は白色味のある淡褐色で風切羽の羽縁と色差があった。これらの特徴から観察個体はズグロチャキンチョウの雄・成鳥と同定した。さらに頭頂から後頸にかけて灰黒色の細かい縦斑が認められたこと、肩と上背に認められた褐色の縦斑に輪郭が不鮮明な赤褐色の縦斑が混じっていたことから、

図1. ズグロチャキンチョウの正面
(撮影者：長嶋宏之 撮影年月日：
2010年3月16日)。

Fig. 1. Front view of the Black-headed Bunting. 16 March 2010. Photo by H. Nagashima.

図2. ズグロチャキンチョウの側面
(撮影者：長嶋宏之 撮影年月日：
2010年3月17日)。

Fig. 2. Side view of the Black-headed Bunting. 17 March 2010. Photo by H. Nagashima.

非繁殖羽から繁殖羽への換羽初期の個体であると判断した。ズグロチャキンチョウの春から夏における雌・成鳥の繁殖羽は頭部と顔が淡灰褐色で、腹部の黄色が淡い。また雌雄とも第1回冬羽は胸と脇に縦斑があり、幼鳥は全体に黄色味がある (Byers *et al.* 2000, Cramp 1994)。上記の特徴はいずれも観察個体の特徴とは異なり観察個体はこれらに該当しない。類似すると考えられる近似種チャキンチョウ *E. bruniceps* は嘴が短く嘴峰が直線的なこと、上面の大・中雨覆の羽縁に褐色味が強いこと、翼をたたんだ状態での初列風切の突出枚数が4枚なこと、背面に黒っぽくてくっきりした縦斑があること、腰と上尾筒が黄緑色なことなどの特徴がある (森岡 1997)。さらに、チャキンチョウは性別、年齢のどの時期の羽衣も観察個体のように頭部が黒くない (Byers *et al.* 2000, Cramp 1994)。これらチャキンチョウの特徴は観察個体の特徴とは異なることから、観察個体をチャキンチョウというには当たらないと判断した。

9. 観察した行動：2010年3月14日午前9時30分ごろ、長嶋は草地で採餌している数羽のカシラダカと約30羽のスズメをおおよそ30mの距離から発見した。そのカシラダカの数双眼鏡でかぞえていた時、観察個体に遭遇した。観察個体はスズメの群れから3mほど離れたカシラダカの群れ8羽と一緒に採餌していた。観察個体は体を低くほぼ水平にして採餌していたので、体の大部分は草丈に隠れて見えなかったが、時おり頭を上げて周囲を見渡し、再び採餌していた。スズメの群れが何かに驚いて近くのアラカシに向かって一斉に飛び上がると、少し遅れてカシラダカの群れがイヌシデの枝に向かい飛び上がった。そのカシラダカの群れと一緒に観察個体も飛び上がり、林の中に消えた。その後、10時ごろから11時ごろまで観察個体は姿を現さず、観察できなかった。3月15日、9時30分ごろ、同じ草地で8羽のカシラダカと約30羽のスズメの群れが約10mの間隔において採餌していた。その中間位置で観察個体が採餌しているのをみつけ、望遠鏡で観察した。距離は約30mであった。観察個体は地面に落ちた草の実をついばんでいた。時おり頭をもたげて周囲を見渡ししながら、下嘴を横にずらし草の実の皮を剥ぐような仕草で採餌していた。何かに驚いたスズメの群れが近くの木に向かって飛び上がり、続いてカシラダカの群れが近くの木に飛び去っても、観察個体は残って採餌を続ける場合があった。また、カシラダカの群れと一緒に近くの木に逃げ込

むこともあった。この飛来、採餌、飛去を繰り返していたが、松原が到着した11時ごろにスズメの群れが大きく舞い上がって東方に飛び去り、カシラダカの群れは西側の林の奥に移動した。少し遅れて観察個体は隣家のテレビアンテナに一瞬止まり、南方向に飛び去った。飛翔は直線的で羽ばたきは大きく早かった。その後この日は姿を観察できなかった。3月16日、9時ごろから15時50分の間、断続的に飛来、採餌、飛去を繰り返した。飛び上がった時にとまる場所はスズメがアラカシの木の表面に近いところ、カシラダカは芽を吹いていないイヌシデの枝で、両者は姿がみえる所にとまる。これに対し、観察個体はアラカシの木の奥の方まで入った。樹間から草地に降りるときは、スズメの群れが降りた後、少し間を置いてカシラダカの群れがバラバラ降り、その後少し間を置いて観察個体が降りてくるのが常であった。また観察個体は樹間から草地に降りるとき「プチッ、プチッ、プチッ」と短く鋭く太く鳴きながら降りることがあった。観察個体の採餌中の動きは、30秒間ほど頭部を細かく上下して採餌すると、頭部を持ち上げ、やや上向きで下嘴を横に動かし、草の実の皮を剥ぐような仕草を15秒間ほど行なった。その後、再び30秒間ほど頭部を細かく上下して採餌し、これを繰り返した。時々何かに驚いた様子で翼を広げ、30cm～50cm飛び上がり同じところに着地した。観察個体は太陽の方を向いて採餌することが多く、観察個体から南に約30m離れて立つ長嶋のカメラのシャッター音に敏感に反応して採餌を止め、辺りを見渡し、安心するとまた採餌を続けた。採餌中の歩行はゆっくりだったが、ウォーキングかホッピングかは確認できなかった。3月17日は10時ごろから11時35分まで、飛来、採餌、飛去を断続的に繰り返した。この日、観察個体はスズメの群れやカシラダカの群れから離れて採餌する時間が長かった。観察個体が採餌に夢中になっている時は、約20mの距離まで東方向から近づくことができ、望遠鏡で観察すると同時に、望遠鏡にカメラを設置して写真を撮影することもできた。13時00分ごろ、観察個体は何かに驚いて飛び上がった。その後13時30分ごろから16時30分の間は姿をあらわさず、観察することができなかった。3月18日は、10時ごろから12時30分までの間には姿をあらわさず、観察できなかった。3月19日も9時ごろから12時までの間は姿をあらわさなかった。観察個体は3月17日の午後、何処かに飛び去ったものと判断した。

10. 写真の有無：あり（図1, 2）.

11. 死体・標本保管場所：—

12. 過去の記録とその文献：日本鳥類目録編集委員会（2000）によれば飛鳥、伊豆諸島、琉球諸島で迷鳥として記録されているが、本州での記録は記載されていない。しかし近年では本州でも観察されており、図鑑や専門雑誌、日本野鳥の会支部報などに観察記録が記載されている。具体的には、五百沢ら（2004）には愛知県渥美町（1994年11月）、京都府京都市（1999年5月）、森岡（1997）には同じく愛知県渥美町（1995年9月）。さらに日本野鳥の会神奈川支部（2007）には藤沢市大庭（1988年8月）と箱根町仙石原（1993年5月）の2例の観察記録がそれぞれ参考記録として記載されている。その他、神奈川県相模原市の相模線相武台下駅近くの休耕田で2009年1月に雄・成鳥の非繁殖羽の個体1羽（伊藤彦左衛門 私信）、埼玉県三郷市の江戸川河川敷で2010年2月に前年生まれの雌1羽の観察記録がある（読売新聞2010）。

13. その他：—

14. 考察：従来の記録に関し、真木・大西（2000）は「飼い鳥としても多く輸入されており、かご抜けの可能性も高い」、高野（2007）は「飼育個体が逃げた可能性もある」と述べている。しかし、大西敏一（私信）は2010年4月10日の電子郵便で「図鑑を書いた時期には多く輸入されていて、ペットショップでもよく見かけたが、最近では見かけなくなった」と述べている。また、東武レジャー企画株式会社のア部雅論（私信）は2010年4月2日の電子郵便で「当園では30年位前に飼育していたが、その後まったく飼っていない」と述べている。この大西敏一（私信）とア部雅論（私信）が述べていることは下記の資料からも窺い知れる。すなわち、2000年から2002年にかけて日本野鳥の会が全国野鳥密猟対策連絡会と共同で実施した「バードウィーク全国一斉野鳥販売実態調査」で、ズグロチャキンチョウは確認されなかった（日本野鳥の会自然保護室 編2003）。続いて2004年5～6月に実施した「バードウィーク全国一斉野鳥販売実態調査2004」で得られた個別のデータと過去5年間の調査結果についてまとめた日本野鳥の会自然保護室 種・法制度グループ（2005）には神奈川県内で1店舗1羽、山形県内で1店舗14羽の合計2店舗15羽のズグロチャキンチョウ販売を確認した旨の記載があるが、埼玉県内でズグロチャキンチョウが販売されていたという記録は載っていない。

さらに、ズグロチャキンチョウの輸入数量を厚生労働省健康局結核感染症課に問い合わせたところ、「2005年9月1日より動物の輸入に際しては、輸入届出制度が適用されるようになった。2005年9月1日から2010年4月30日の間、厚生労働省検疫所にズグロチャキンチョウの輸入届出はなかった」旨回答があった（水野玉青 私信）。

これらのことから2000年以前はズグロチャキンチョウの輸入数や飼育数が多かったようだが、その後、飼育数の減少化が進み、特に近年、2005年から2010年の間には新たな輸入届出がなされていないことから、全国での飼育数は大幅に減少していると考えられる。一方、観察個体に残された飼育の証拠を検証したが、明らかに飼育されていた個体であるとの確証は得られなかった。具体的には、観察個体の足に足環などの標識が付いていなかったうえ、足環などの標識が付いていたとみられる痕跡もなかった（図1）。また風切羽や尾羽が極度に傷ついていたり、磨耗していたということもなかった（図2）。さらに、カメラのシャッター音や人の動きに対して敏感に反応し、観察個体に容易に近づけなかった等、飼育されていた個体にはない野生としての特徴が認められた。これらのことから、観察個体は飼育個体が逃げ出したのではなく、野生の鳥が迷って飛来した可能性が大きいと考える。

本稿をまとめるに際し、3名の匿名レフリー、大関義明氏、名尾良英氏、大西敏一氏、ア部雅論氏および水野玉青氏には有益な助言をいただいた。感謝の意を表す。

引用文献

- Byers C, Olsson U & Curson J (2000) *Buntings and Sparrows. A Guide to the Buntings and North American Sparrows*. Pica / Christopher Helm, Mountfield.
- Cramp S (1994) *Handbook of the Birds of Europe the Middle East and North Africa: The Birds of the Western Palearctic: Volume IX Buntings and New World Warblers*. Oxford University Press, Oxford.
- 五百沢日丸・山形則男・吉野敏幸 (2004) 日本の鳥 550 山野の鳥 増補改訂版. 文一総合出版, 東京.
- 真木広造・大西敏一 (2000) 日本の野鳥 590. 平凡社, 東京.
- 森岡照明 (1997) 新しい識別の試み 第1回 チャキンチョウ? それともズグロチャキンチョウ? *Birder* 11(5): 80-83.
- 日本鳥類目録編集委員会 (2000) 日本鳥類目録改訂第6版. 日本鳥学会, 帯広.
- 日本野鳥の会神奈川支部 (2007) 神奈川県鳥類目録V. 日本野鳥の会神奈川支部, 横浜.
- 日本野鳥の会自然保護室 (編) (2003) 野鳥の飼養・販

- 売・輸入の実態とその問題点. 日本野鳥の会自然保護室, 東京.
- 日本野鳥の会自然保護室 種・法制度グループ (2005) バードウィーク全国一斉野鳥販売実態調査 2004, 日本野鳥の会, 東京.
- 高野伸二 (2007) フィールドガイド日本の野鳥 増補改訂版. 日本野鳥の会, 東京.
- 読売新聞 (2010) 珍鳥三郷で確認 ズグロチャキンチョウ. 読売新聞日刊 第 48185 号: 29.